

YJ-12 型対艦ミサイルの飽和攻撃能力

漢和防務評論 20170303 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国の対艦ミサイルは、最近では性能が向上し、米国空母艦隊にとって驚異となりつつあります。
その理由は遠距離（空対艦で 400KM 以上）から超高速（約マッハ 3）で接近する巡航ミサイル YJ-12 が完成し、さらに飽和攻撃を行う能力が付与されたと思われるからです。
漢和の記事によると、艦上発射型がミサイル駆逐艦に逐次装備されているようです。

KDR 東京平可夫、編集部珠海報道：

珠海航空ショーで、注目していた輸出型対艦ミサイル YJ-12 が展示された。同ミサイルは、射程 290KM、弾頭重量 250KG、その他の数字は公表されていない。ただ CASIC 第 3 研究院が開発したことだけは知られている。展示された原寸模型から見ると、長さは 7M 級の可能性がある。しかし複製元と思われるロシアの KH-31 対艦ミサイルは、長さが 4.7 乃至 5.3M、重量 600KG、直径 360MM、翼幅 914MM である。したがって YJ-12 の寸法は、射程 70 乃至 110KM の KH-31A/AD/P/AP よりもずっと大きい。後者には、空対艦型と反輻射型がある。YJ-12 の最大速度はマッハ 3 に近い可能性があり、低空飛行の KH-31 の速度はマッハ 2.7 である。後者は相当優れた対艦ミサイルで、1990 年代初期、かつて米露が標的として共同開発しようとした。それを MA-31 と称したが、いつの間にか立ち消えになった。しかし MA-31 はテスト中に、高空でマッハ 3.5 の速度に達している。低空でも MA-31 はマッハ 2.7 まで到達していた。
外形から判断すると、YJ-12 は、終末段階でアクティブ・レーダー誘導を採用しているはずだ。ミッドコースでは必要時に”北斗”衛星誘導を付加することができる。輸出型は GPS/GNASS を採用する。この種の射程の対艦ミサイルの誘導方式では、これは一般的といえる。

KH-31 と中国との関わりは、1990 年代の平可夫の関連記事を遡って見ると分かる。SU-30MKK 多用途戦闘機とセットで中国に輸出された。中国は、KH-31 対艦ミサイル、反輻射ミサイルを獲得した。またライセンスにより反輻射型を生産した。したがって YJ-12 は KH-31 の完全コピーであるとの見方は、不公平だと思う。基本的な思想は当然 KH-31 から来ているが、中国人は拡大し改良した。中国は、KH-31 を基礎にして、自ら YJ-91 型反輻射ミサイルをライセンス生産した。外形は KH-31P と同じであった。当然、YJ-12 と比べると大きさは小さい。YJ-91 の大きさは公開されており、珠海航空ショーでも展示されたことがある。長さ 4.7M、直径 0.36M である。YJ-91 は、JH-7 型戦闘爆撃機に搭載され、シーカーもロシアからライセンスを得て生産した。ロシアは 200 セッ

トのシーカー部品を輸出した。これは本誌が 1990 年代に報道した。

KDR は、中国海軍が使用する YJ-12 艦対艦ミサイルの射程は 300KM を超え、空対艦型の射程は 400KM を超えるのではないかと見ている。なぜなら中国海軍は、すでに相当巨大なデータリンクシステムを建設しており、ヘリコプター、偵察機、海軍通信機、潜水艦伝送目標データを通じ、たとえ H-6M 爆撃機のレーダーが水上目標を探知できなくても、ヘリのデータリンクを通じて指揮できると考えられる。

YJ-12 の写真を見ると、これは海軍の汎用型であり、艦対艦型、陸対艦型、空対艦型がある。956E/EM 型ミサイル駆逐艦 (DDG) は、現在これらに換装中である。956DDG は、以前は射程 120 乃至 240KM のロシア製 3M80E 型艦対艦ミサイル (モスキート) を装備していた。最初の供給量は 55 セットに達した。これは米国空母と台湾の KIDD 級ミサイル駆逐艦に驚異を与えるものであった。1990 年から 2000 年にかけての数回の海空大演習において、3M80E は頻繁に飽和攻撃訓練を行っていた。現在は、3M80E は演習で使用されていない。これは 956E/EM が対艦ミサイルを YJ-12 に換装したことを示している。YJ-12 の艦対艦攻撃力は、射程も射速も 3M80E に比べ優れている。中国海空軍のミサイル開発史を縦観すると、基本的法則が容易に分かる：まず第一にロシアから本体を輸入し問題の有無を研究する。1990 乃至 2000 年の”対台湾軍事闘争”準備時期は、輸入したミサイルを過渡的に使用しその後逐一中国製 (複製) に換装している。

YJ-12 は、2 年前に出現した CX-1 (YAKHONT ミサイルのコピー、CASC 第 1 研究院が開発を担当) と如何なる関係にあるのか？一種の可能性は次の通り：CX-1 は、本来自己資金で開発され、輸出用に供されるはずである。なぜなら通常、中国海軍の戦術ミサイル、特に対艦ミサイル開発は、CASIC 第 3 研究院が担当するからである。CX-1 の射程は 290KM、速度はマッハ 3、長さは 10M 級、直径 800MM である。飛行中ミッドコースでは北斗/GPS 誘導を採用している。両者とも飛行の終末段階では超低空飛行能力がある。

別の可能性として、運搬ロケットを設計している CASC 第一研究院が海軍戦術ミサイルの入札に介入してくる可能性がある。応札できなかった場合、輸出用に向けることになるか？中国軍事工業、装備開発の規律に照らせば、論理に合わない。

技術的に見れば、CX-1 は YJ-12 に比べサイズが長いが、射程は同じである。

今後、055 型ミサイル巡洋艦が YJ-12 を装備する可能性は排除できない。YJ-12 は、発射速度とエアロダイナミックスの関係で垂直発射できるように改修するのは困難である。YAKHONT/BRAHMOS 艦対艦ミサイルには垂直発射型がある。また海軍航空兵部隊の J-16 や J-15 戦闘機が今後 YJ-12 を搭載するか？高度の注意が必要である。射程 400KM 以上の航空機発射型 YJ-12 を YJ8-3K のような亜音速対艦ミサイルと組み合わせ、弾道の高低、速度の高低 (高度と速度のハイローミックス) を活かすことによって最も脅威を感じるのは台湾の KIDD 級ミサイル駆逐艦である。KH-31A/P を搭載した SU-30MK2 に比べてより大きな脅威となる。J-16、J-15 が一旦飽和攻撃を実施した場合、米国空母にとって厳しい状況となる。300KM 以遠からのスタンドオフ攻撃に対抗するには、

F-18E/F、F-35 が J-16、J-15 をより遠方で迎撃するしかない。しかし SU-30MK2 は米国空母戦闘群の防空ミサイルの射程内に入らないと攻撃することができない。

YJ8-3K/C-802A 空対艦ミサイルを使用して攻撃する場合も同じである。この種ミサイルも第 3 研究院が設計し、パキстанはすでに C-802A を装備している、と述べている。葫蘆島で行われた海上テストの結果、射程は 230KM を超えた。現在 JH-7A に搭載しているが、今後 J-15、J-16 に改良型が搭載されるであろう。

ついでに説明すると、輸出市場を拡大するために、中国の大型武器集团公司は、各個に空対艦及び空対地ミサイルを開発している。AVIC は、今回 TL-17 空対地ミサイルを推奨した。かつてシンガポール航空ショーで TL-7 を推奨したことがある。写真を見ると、2 者の外形は完全に同じで、中航洪都（中航工業江西洪都航空工業集团有限责任公司、元南昌飞机制造公司）で生産されたものである。TL シリーズのミサイルは主に輸出用であり、当初洪都は、イランにミサイルを輸出したため、米国から制裁を受けた。TL-7 は対艦型であり、TL-17 は対地攻撃型である。シーカーが異なる。

TL-17 は当然輸出用に設計されたもので、AVIC が設計した戦闘機に付属して輸出されている。注意すべきことは、この種の空対艦/空対地ミサイルの精度が向上していることである。TL-17 は、GPS/北斗+テレビ或は赤外線誘導方式を採用しており、CEP は 3M、射程 230KM である。長さは 5M、直径 0.38M、翼幅は 1.28M である。弾頭重量は 320KG である。

KDR が指摘する新たな問題：中国軍には、各種武器の生産、開発、購入についての慣例がある。KDR がすでに説明したように、中国は自国用の武器は直属の軍工企業から購入する。其の他の従属的な軍工企業は、単に副業方式、或いは私生児方式で自己資金を集め、輸出を目的とした武器システムを開発する。例えば、洪都が生産した各種対艦ミサイル、CASC が生産した CY-1 等々である。しかし一旦戦争が始まれば、直属軍工企業の武器生産量では不足するため、中国軍はこれらの私生児を緊急導入することになるのか？こうなれば、訓練及び後方支援面から見て新たな問題が発生すると思われる。

以上